慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	版本探求の意味、面白さ
Sub Title	Interest in pursuit of printed books
Author	井上, 進(Inoue, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2011
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.46 (2011.) ,p.23- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫開設五十年記念講演とシンポジウム古典籍の探求 : 書誌学の世界
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20110000-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

版本探求の意味、面白さ

井上　進

西欧のbibliographyに対応する訳語では書誌学と言い、中国の伝統的な学問体系から生じてきた名では目録学、あるいは目録・版本の学などと言われる学問は、いったいどんなことをするものだろうか。辞書的に説明するとすれば、要するにそれは書物の学問で、個別テキストの成立事情や伝来、版本問題、また本文校訂、あるいは書物の素材や装訂などに関する研究もあれば、ある体系の下に個々の書物を位置づけて目録化すること、解題を著すこと、またさらには文化現象としての書物を考える、つまり書物の文化史、ないし出版文化史の研究などもここに含まれる、といったことになろうか。

こうした書物の学問は、古人のことばを借りれば「書を読むに要領を知」るためのもの（張之洞『書目答問』略例）、よって「目録の学は、学中第一の緊要事なり、必ずこれより塗（みち）を問い、はじめてよくその門を得て入る」などと言われたりもする（王鳴盛『十七史商榷』一）のである。かくして、いやしくも人文系の諸学を治めるというなら、何を

専門とするにせよいわば基礎的素養として、目録学につき一通りは了解しておくべきだ、となるだろう。だが「べき」とそう「ある」ことは、ここでもやはり一致しない。

いつたい学者に書物は附き物である。が、学者なら誰でも書物のことに明るいかと思ふと、それは大きな間違ひである。……これ（書物の学問）には特別の天稟と修業とが要るからである。書物のことに明るい学者は、実は極めて少いのである。

疑問の余地なく「書物のことに明るい学者」であった神田喜一郎は、かつてこのように述べたことがある（内藤湖南著『目睹書譚』序）が、これは目録・版本に通じた学者が「実は極めて少ない」という事実をすこぶる率直に、あるいはいささか無遠慮に語ったことばと言ってよかろう。

じっさい「学者に書物は附き物」だから、「学者なら誰でも書物のことに明るい」という誤解は、当の「学者」自身にもよく見られるのであって、ある方面の学者が、その専門分野に関係する古い書物の版本解説などをすると、まったく滑稽で幼稚な誤りを犯しながら、しかも本人は大まじめ、自分の言っていることのおかしさに全然気がつかない、などというのはザラにある話なのである。だがそもそも目録・版本が専門的な学問研究の一分野であるのなら、古槧旧鈔を手に取って見たこともロクになく、普通本の山と格闘して編目に従事したこともない人が、どうして突然専門家になったかのごとく、したり顔で版本を語ったりできるのか。そんなことは最初から無理な話であるし、またひとつの専門研究に対する畏れを知らない、あるいは敬意を欠いた態度でもあろう。

しかしである。たしかに書物の学問に通じようとするなら、それ相応の「修業」はむろん積まねばなるまいが、そのうえ「特別の天稟」が必要というのはどうであろう。目録・版本というのは、容易には普通の人の接近を許さない、

何やら不可思議で神秘的なものであるのだろうか。そんなことはないはず、いやしくも目録・版本がひとつの学問であるというなら、それはあくまで合理的、客観的な説明をなしうるもののはずである。

おそらく他のどんな専門領域でも同じことだろうが、書物の学問についても、そこに通ずる門戸はだれに対しても開放されていて、特別の人でなければ受け付けない、などということはない。その入り口に立つには、単に興味がある、関心があるというだけで十分、だいたい最初から専門家なんて人がいるはずはなく、だれでも最初はズブの素人に決まっている。

ただその門をくぐってさらに奥へ進んでいこうという場合、向き不向きということがあるのは否定できないだろう。目録・版本は書物の学問、というのは文献の学であると同時にモノの学でもあるわけで、古籍そのもの、版本というモノに愛着を覚えない人は、この学問には向いていない。版刻や鈔写のみごとな、また紙墨装訂の美しい本を見ても何も感じない、そもそもそれがみごとであるとも美しいとも感じないというなら、そうしたものと忍耐づよくつきあう、じっさいあからさまに言うなら、ひどく辛気くさい作業を延々と続けることなど、とても不可能に違いない。

学問研究というのは理性のいとなみ、たしかにそうではあるのだけれど、それが面白いとか楽しいという感覚を生まないのなら、あるいはその対象になんらの愛着も感じないのなら、その研究に従事しつづけるなどできることではない。ならば書物の学問には、いったいどんな面白さがあるのだろうか。

目録・版本の学で昔も今もひろく行なわれているのは、個別テキストに関する校勘学や版本学的研究、つまりある書物の正しい本文を追求したり、あるエディションがいつ、どこで、だれによって生み出されたのか、またそのテキストと他のテキストとの位置関係を探ったり、といった研究であるが、ここでは私が今行なっている、版本それ自体

を史料とする研究を例として、そのうちの興趣を少しばかり述べておこう。

なお私が謂うところの、版本それ自体を史料とする研究とは何のことかと言うと、これについてはある建築史の専門家の話を引いておきたい。この先生、私にとっては割と気の置けない人なのだが、かなり昔のある時私に向かって言うよう、お前ら文献屋は書物を史料として読み、それによって研究を行なっているわけだが、オレたちは建築物、あるいはその遺構、遺跡を史料として読んで、それで研究をしているのだ。つまり読む史料は違っても、やっているのは同じこと、だからお前らちょっとばかし書物を読むからといって、あまりデカい顔をするな、と。

断っておけば、私は自分が少しばかり書物を読むからといって、特にデカい顔をした覚えなどないのだが、いつも文献屋に囲まれつつ仕事をしていたこの工学博士からすれば、お前ら文献屋はあたかもモノより文献の方が偉いかのごとくに振舞うが、これにはまったく我慢ならん、ということであったのだろう。ともあれこのモノの説はなかなかに説得的、少なくとも私にとってはそうであったが、実のところ私がよくこの説に共感できたゆえんは、自分もモノの学を目指していたから、むろん一方では相変わらず文献屋のままであったけれど、もう一方では古い版本のひとつひとつを史料として「読む」という、そういう研究を行ないつつあったからであろう。

それで話はようやく具体的になってきて、たとえば国立公文書館に蔵される会通館活字印本『錦繡万花谷』である。これは弘治七年、つまり一四九四年、無錫の華燧によって印行されたもので、一般には銅活字本とされるはなはだ有名な一群の本の一。ただしこの本の版心に見える「会通館活／字銅版印」の文字は、潘天禎が指摘する（「明代無錫会通館印書是錫活字本」、一九八〇、今は『潘天禎文集』、上海科学技術文献出版社、二〇〇二、による）とおり、決して銅活字印の意ではないはずで、これも潘氏が別の史料によって主張するところなのだが、実際にはおそらく錫活

字本であろう。

さてこの会通館本『錦繡万花谷』であるが、巻端に冠せられる弘治七年八月の華燧序を読むと、この書は「広博つぶさに備わ」っていて学ぶ者に有益なので、「提学僉憲（南直の提督学校である御史。「僉憲」は僉都御史の意だが、提学となるのはふつう巡按御史で、ここでもそうなのではないか）胡先生が翻印の盛心、吾が郡大夫（常州知府）華侯が転委の美意」によって出版されたとあり、つまりは南直提学の意向を受けて、弘治七年に会通館より初めて印行されたものと考えられよう。

ところがである。北京の国家図書館（北京図書館）館目に著録される会通館本『錦繡万花谷』は弘治五年印といい、かつ版式についても、公文書館本が四周単辺なのに対し北図本は四周双辺、実物を見ていないのはいかにも遺憾ながら、これはやはり別版と考えるのが順当である。さらに、こちらは実査していて間違いないのだが、台北の国家図書館（かつての中央図書館）には『会通館印正錦繡万花谷』というものが二部蔵されており、これは上記の二本が宋版以来の前後続集各四十巻、共に百二十巻という体裁なのに対し一集一百巻、しかもこの二部は版式も少しく異なれば、排字も明らかに別であって、その異版たることは疑いない。

あるひとつの書物にいくつもの版があるというそのこと自体は、別に珍しくともなんともない、ごくごく当たり前の話である。しかしこの『錦繡万花谷』の場合は、ほぼ同じ時期に、同じ人物が、同じ書物を繰りかえし何度も出版しているわけで、これはまったく尋常でない。ならばこうした現象はいかに解釈されるべきなのか。その答えを探るには、明代中期の書物事情ないし読書事情、無錫華氏会通館が行なっていた出版活動の特性、さらに活版というものの一般的性格などを勘案しなくてはなるまい。

そして会通館の出版活動がいかなるものであったのか、さらには活版の一般的性格を考えるとなれば、単に『錦繡万花谷』一書だけでなく、会通館の出版書、さらには明代中期の活版書をできるだけ網羅的に、ひとつひとつ実査して、その本に即した知見を蓄積していかなくてはならない。また明代中期の書物事情ないし読書事情を知ろうというなら、この時代の書物をできるだけ多く見て、当時の書物のあり方、出版のあり方を具体的に把握することが必要だろう。

つまり版本を史料として「読む」というのは、いわばばらばらになり、またかなりの部分がすでに失われてしまっているだろうジグゾーパズルのピースを、一片一片丹念に、辛抱づよく収集しながら、その各片が占めるべき位置を考え、またそれらの全体像を証拠と論理によって復元していくことであり、その過程にはなかなかどうして知的なスリルが感じられるに違いない。もっともそうした知的スリルを味わうためには、労多くして功少ない作業に黙々と従事しつづけることが必要なわけで、これによく耐えるには、すでに言及したごとく、古い書物に対する愛情がどうしても必要ということになろう。

またついでに言っておくと、モノの調査は決して宝探しではないのだが、そこに宝探し的な興味と興奮が存在するのも事実であって、調査の過程で意外な発見があったりすれば、覚えずうれしくなるのは人情の自然である。会通館本にちなんで言えば、台北・国家図書館に蔵される『錦繡万花谷』の異版をこの目で確認した時には、目録を通じてその書誌の基本はすでに承知していたものの、やはりある種の感動を覚えたし、また台北・故宮博物院蔵の『会通館印正文苑英華纂要・辨証』、および台北・国家図書館蔵の同『辨証』が、ともに目録にあるとおりの原版ではなく翻版、というのは活版ならぬ活版を底本とした整版本であることを見出した時には、何やらちょっとした「発見」をしたような気分であった。

もちろん本来は会通館の活版本を見ようとしたのであるから、それが見られなかったのは遺憾と言えば遺憾であったけれど、活版の整版化という一般的傾向が、ここでも確認できたことはなお収穫であったし、また「小人は人の美を成すを欲せず」で、北平図書館以来の著録ミスを自分が見つけたことには、正直言ってちょっとばかし愉快を感じたのである。

このほか、中之島図書館で約嘉靖中刊本『新刊校正音釈春秋』を閲覧すると、その巻首の胡安国序に「新刊会通館校正音釈春秋序」という標題がついていて、それが莫伯驥『五十万巻楼羣書跋文』に著録される「明会通館活字銅板校正音釈春秋」に由来すると知れた時も「おっ」と思ったし、寛永三年梅寿印行の古活字版にもとづく寛永七年梅寿重刊本『会通館翻印素問玄機原病式』によって、会通館印行書に新たな一種を加えられた――今までこの書と会通館を結びつけて語った文章は見たことがないので――時にも、やはりささやかながら一種の得意を感じたのであった。書物の山をかき分けていると、この程度の「発見」にはよく出くわすものなのである。